

かも 市史だより

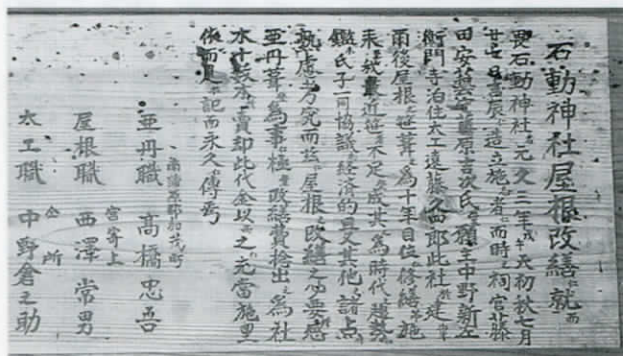
平成27年3月
No.31

◆編集発行 加茂市幸町二丁目3番5号 加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480

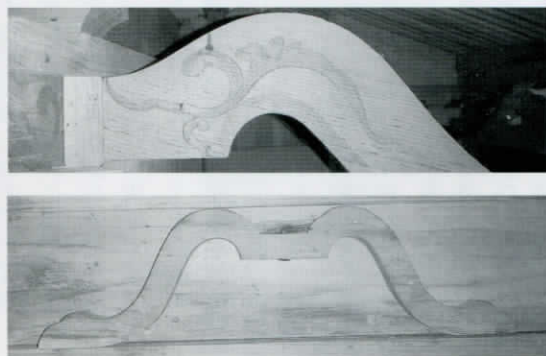
宮寄上・石動神社本殿の建築



▲ 本殿 全景



▲ 昭和28年の屋根替え銘札（部分）



▲ 向拝の海老虹梁と妻面の墓股

宮寄上字岩野の石動神社は、もと石動山頂にあった建物を幕末頃に集落近くへ下ろし、現在地へ移転したとされる建築です。拝殿は平成二十一年（二〇〇九）の新築ですが、一間社流造の本殿は表面を研磨したほかは旧観を保っています。

建築は正面に向拝（こはひ）が取り付き、背面側を除く三方に縁（えん）を廻して両脇には脇障子を立てています。柱は身舎が円柱、向拝は方柱と格式に応じて使い分け、斗組は出三斗組、正面の軒は二軒並行繁極とするなど、小規模ながら本格的な手法を用いています。

建築当時の記録は残っていませんが、昭和二十八年（一九五三）拝殿の屋根替えをしたさいの銘札に、元文三年（一七三八）七月に遠藤久四郎という寺泊（長岡市）の太工が棟梁となり建立された石動神社の由緒を記しています。この由緒の根拠は不明ですが、向拝の海老虹梁の渦巻き彫刻や妻面の墓股の形状は確かに古様です。屋根など一部は新材に変わっていますが、全体としては正統的な手法による古式の神社建築となっています。

日露戦争従軍兵士の懷中日記

明治三十七年（一九〇四）勃発した日露戦争は近代の日本史を画した大事件で、地域の民衆も否応なく巻

き込まれました。なかで、加茂町上条の川口清太郎（一八八〇～一九〇五）は明治三十三年に入営した人物

▲川口清太郎の「懷中日記」より
遼陽攻防戦の記事

天 氣	寒 暖	日 一 月 九	戊 戌 霜 水
晴 天	冬 令	本朝を移す年俟書 三ノヲ 録ナラナニ 録ト ナリテ前追戦中同位 猛烈ニ砲火ノ多ニ 正移キタル國難ニテ 而戰中停止シ日没 得テ午後ニ始メテ攻 撃ニ開始シ 激烈ナル 銃火ヲ交ス	本朝を移す年俟書 三ノヲ 録ナラナニ 録ト ナリテ前追戦中同位 猛烈ニ砲火ノ多ニ 正移キタル國難ニテ 而戰中停止シ日没 得テ午後ニ始メテ攻 撃ニ開始シ 激烈ナル 銃火ヲ交ス

天氣
寒暖

日二 月九

已亥癸丑金

午前之晴、高、西側傾
ナ九里葉台南地、夕陰
（終山）ノ中、候不
贏、頑強ニ抵抗ス或ハ
地雷ヲ用ヘ又鉄條網
雷ヲ掛ケ吾等モ多
大に被害ヲ被レ頗ル困
難ニ新シキ事トナル也
今夜敵ノ音堂ノ巻吹テ
逆襲ス事アリ云外諸用
死力ヲ過シテ激戰セル所
然リタル敵、遂ニ退却ス
敵燒燬知ル村々至部又
是等ノ前哨隊ニ事ヲ掩護
時々入

(九月一日)
午前砲撃、午後出發、三〇(連隊)
第一線、十六第二線トナリテ前進
戰鬪開始、猛烈ナル砲火ノ為メニ攻
撃頗ル困難ニシテ、一時戰鬪停止シ
日没ヲ待ツ、午後七時頃ヨリ攻撃開
始シ、激烈ナル銃火ヲ交ユ
本日戰鬪ニ飲用水ニ不自由ヲ來シ
泥水ヲ呑ム

晴天

(九月一日)

午前二時頃敵ノ防御線ナル黒英台高地（一名饅頭山）ヲ占領ス

敵ハ頑強ニ抵抗シ、或ハ地雷ヲ用ヘ
又鉄条網ニ電氣ヲ掛け、吾軍ニ多大
ノ損害ヲ与ヘ頗ル困難ノ戦鬪ナリキ
今夜ハ敵ハ音楽ヲ奏吹シ逆襲シ来リ
シモ、我旅団ハ死力ヲ竭シテ激烈ナ
ル射撃ヲナス、敵ハ遂ニ退却ス、敵
ハ爆裂物ヲ持チ来リ吾軍ノ前哨線ニ
来リ、抵抗ス

です。開戦時新発田歩兵第十六連隊に属し、三十五年十月には上等兵となって従軍します。明治三十七年二月、満洲（中国東北部）の利権をめぐり日露が開戦すると、第十六連隊は朝鮮半島から鴨緑江を渡って満洲に進みますが、この途次、清太郎は日々起こった事柄をくまなく「懐中日記」に付けました（神明町川口繁夫氏所蔵文書）。

日記は二月六日に始まり、翌三十八年一月二十五日で終わっています。記事はいずれもごく簡潔なものです。が、つぶさにみると大小各様の部隊の動きがわかります。従軍中は清太郎単独での行動はみられず、しばしば部下二名を連れて斥候に出ています。遠方に敵の大軍を認めるや小隊（通常二〇〜四〇名）を組んで敵の前面に迫り、側面に回ってその勢力を窺い、後方の中隊・大隊あるいは連隊本部に報告し、次の行動について命令を待っています。本隊から離れてしまい敵の襲撃で苦戦する記事では、小隊長の指揮下果敢に部下とともに闘っています。

この戦争で、日本陸軍は奉天（現在の瀋陽）を陥落させることを大目標としました。明治三十七年九月の遼陽会戦は、その前哨戦の大きな山場でした。遼陽攻防のさなかの九月一日、ロシア軍の猛烈な砲火に遭い出撃できなかった清太郎は日没を待

ち攻撃に移りますが、戦鬪の渦中にあって飲料水に不足し、泥水をすすって渴を癒すなどしています。翌日、清太郎ら日本軍はロシア軍の地雷や鉄条網に苦戦しますが、激烈な射撃を打ち込んで応戦し、退却させることに成功します。この戦功により、十月清太郎は伍長へと昇進しました。明治三十八年三月に入ると奉天会戦が始まりますが、第十六連隊は、奉天の近郊で丘陵に堅固な陣を構えたロシア軍の猛烈な射撃にさらされ、多大な犠牲者を出しました(『新潟県百年史』下)。この激烈な攻防戦の渦中にあった三月六日、清太郎は戦死します(『新潟新聞』明治38・4・5)。日本軍は約七万人、ロシア軍が約九万人の死傷者と二万人の捕虜を出して奉天が陥落する三月十日の四日前の戦死でした。

この戦争で市域の戦没者は一六名に達しています（加茂市遺族会『芳烈顕彰録』）。のち遺族の許へ戻された日記には緊迫した戦闘のほか、郷里からの通信や慰問の品、陣営での日常を記し、敏捷果敢で親しみやすい清太郎の人物が伝わります。没後は曹長の榮譽を贈られ、明治三十八年七月五日営まれた町葬では、加茂町長で加茂尚武会長を勤めた笠原永昌を始め、そうそうたる人物が弔辞を寄せて清太郎の死を悼んでいます。

(近現代部会 大塚 哲)

滝
開
き

日、加茂町公園期成会の関真次郎（綴物業）・小嶋重太郎（呉服商）・橋本要平（紙商）や町の割烹業界などが中心となり、駒岡沢の長瀬の滝を整備し、「開瀑の式典」を挙行しました。当日は、町内外の重立ち七十余名と新潟・長岡の各新聞社員を招待し、神主による水神祭の奉仕、祝吟披露、主催者代表の開会挨拶後、現地で十数名の芸妓を交え、祝宴を催しました（八幡小池博行氏所蔵『全国神職会会報』第二六号）。

また、その翌年六月には五番町等の有志が、耕泰寺沢にある古滝に加工を施して数条の瀑布を新設しました。この二か所の滝は、その後も評判を呼びました。



▲ **長瀬の滝** 大きく三段からなる
うちの上段の滝

加茂町小

●加茂源川の瀧開き 加茂町小柳太郎氏が昨年七月宇上條地内源川に瀑布を設けし其際盛大なる瀧開きを奉行したる事は當時報道したるが近來好晴打續き暑氣を加へたるより來る十五日より開瀧すべく日下準備中なり各地は有名な木葉石源川石の産地にして特に源川不動尊の鎮坐あり參詣旁々避暑するには好適の地なりといふ

源川（大皆川）の滝開きを報じた記事『新潟新聞』明治44・7・14

明治三十七年の夏は暑気が厳しく、長瀬の滝と耕泰寺沢の滝を始め「付近の各瀑布、みな浴客を以て満てり」、「遊興の雅客多し」（『新潟新聞』明治37・8・2）などと、地域の滝は見物客で賑わっていました。紙面には「浴客に供する物価」、「瀑場の繁盛」などとも記され、滝場の多くは茶屋などの供応施設も設置されていたようです。

さらに、四十三年七月にも上条の
小柳菊太郎が^{おぎやうきくたろう}大皆川上流で滝を整備
後、盛大な滝開きを挙行し、三条方
面からも多数の来遊者があった、と
報じられています。このように明治
後半期、特に三十年の北越鉄道開業
後に、加茂市域では町外からの避暑
客の来場を期待した滝開きが流行し
そこには涼を求める多くの客が訪れ
ていました。

三浦チヨの
弔辞

明治三十七年（一九〇四）二月十九日、明治維新の志士で、地域医療に尽くした二階堂保則が享年七十歳で亡くなりました。二月二十一日営まれた保則の告別式では、各界の人士が彼の死を悼み弔辞を寄せました。なかで、唯一女性の立場で「自う資ヲ投ジテ産婆養成所を起シ、以テ多数ノ学生ヲ養成シテ全然斯道ノ面目ヲ改ムル」と保則の功を称えた三浦チヨノ（千代能）の弔辞は、明治期の保健衛生の動向を窺わせて注目です。

三浦子ヨノの弔辞（吊詞）（加茂市教育委員会所蔵二階堂家文書）

吊詞

[illegible]

あります。

三浦チヨノ（旧姓水口、一八六七（一九三九）は五番町の人で、県立新潟医学学校産婆教場（明治十四年創設）の第二回卒業生です。新潟医学学校産婆教場は西洋医学に基づいた産婆養成施設です。生前の保則も産婆講習所の設置を請願し、産婆の養成が衛生上第一義の事項であるなどと県からの回答を得ています（加茂市教育委員会所蔵「二階堂家文書」）。明治三十二年、国は産婆に資格制度を打ち出しましたが、チヨノが弔辞で詠んだ産婆養成所の設置は国・県の意向と大きく関わると思われます。こうした内・外の動きと同調して明治三十三年八月、南蒲原郡加茂郷区産婆組合が設立されます（『新潟県助産婦・看護婦・保健婦史』）。組合は保則没後の時点で十余名の会員数を誇り（『新潟新聞』明治39・7・25）、チヨノは総代として活躍しました。

組合は会員の技能向上や待遇の改善に取り組み、チヨノの没後は子の三浦ムツ、さらにムツ長男の妻チエに引き継がれるなど三代にわたって發展しました。昭和四十年頃以降自宅分^{かんぶん}婉が減り、施設分^{かんぶん}婉が増加すると組合員こそ減りましたが、現在でも（社）新潟県助産師会燕三条地区の名称で活動は続いています。

(民俗部会 岩野笙子)